

## スラヴ語・スラヴ文学研究室での金沢先生の思い出

鳥山華子

2004年に修士課程を終えて、スラヴ語・スラヴ文学研究室を離れて10年以上が経った。今ではロシア語を遠く離れて、漢和辞典の仕事をしている。辞書編纂の過程は、数年前の三浦しをんの小説『舟を編む』と、それを原作にした映画で広く知られるようになったが、一人の編者の名前を掲げていても、その下には、編者の方針にそって原稿を書く人、編集する人が複数控えているものだ。そういう場合、声がかかるのは、編者の弟子であることがよくある。また、既に編者が亡くなっている辞典の改訂などを考えるとき、「弟子筋の方にコンタクトをとって…」という話になることもある。私は直接携わってはいないのだが、実際に編者の情熱と、それを支える同門や弟子の方々のひたむきな努力に支えられた大仕事を間近で見る機会に恵まれた。そのお弟子の方々は、学者としてのプライドから取り組むというのではなく、先輩や恩師を慕う思いに突き動かされているように感じられた。（そこには、もちろん長年のお付き合いから引きずられるように引き受けられた方もいらっしやうとは思ふ。）

しかし、先生と弟子とはどこでもそんな熱い関係なのだろうか。このような師弟関係に触れると、自然とスラヴの研究室のことが思い出され、考える。例えば、私の指導教官だった金沢先生のお仕事を、門下生一同が何かお手伝いするとしたら、どんなことになるのだろう。

そして、最初に先生にお目にかかった時のことが思い出される。

私が金沢先生に初めてお目にかかったのは、2002年、修士課程の入試面接の時だった。かなり緊張しており詳しくは覚えていないが、まず思い出すのは、私が卒論で少し言及したロシア語の単語について、長谷見先生から大変に詳細なご指摘があったこと。沼野先生から提出書類に書いたことで疑義が呈されたこと。米重先生から、何か冷や汗をかくような質問をされたことだ。では、金沢先生からのご質問はというと、本当に情けないが思い出せない。この面接時の先生のごことで記憶にあるのは、ご発言の何かではない。入学できた際の、指導教官は？というどなたかの質問に、私が「金沢先生にお願いしたいと思う」と答えた時の反応である。

「あら、私なの…」というように、とても困惑されているご様子だったのだ。

私の卒論のテーマはチェーホフで、その後も主に19世紀のことをやっけていこうと考えており、願書にもそのようにも書いたはずである。ドストエフスキーを研究なさっていた先生に指導を仰ぐのは、それほど見当違いではないだろう。だとすると、何故先生はお困りになったのだろうか。緊張のあまりネガティブ思考の私は、思った。卒論も面接内容もきつと先生の御眼鏡にかなわなかったに違いない。覚悟の足りない出来の悪いのに来られても、とお思いなのではないか。学部時代を過ごした東京外国語大学の、学生は暖かく受け入れるものという気前のよい雰囲気慣れきっていた私にとって、金沢先生の反応は正直なところ、結構ショックだった。

しかし、その後入学してから、ショックを若干引きずりながらも授業や研究会で先生のご指導に接してみると、あの先生の困惑は、私の出来の悪さ以外にも理由があるような気がしてきた。私だけが感じていたことかもしれないが、授業で、学生の前に出て「教える」立場でお話になるとき、先生は少し心細そうなのだ。教師というのは、学生に試されていると覚えることがあるそうだが、先生のご様子は、こちらに心細さが伝染してしまいそうなたちよとダイレクトなところがあつた。逆に、少人数の授業や、研究会で、ご自分も私たちと同じ目線でお話になるときは、生き活きとされ、声も弾まれる。口にされるコメントも心なしか力強い。そのうち私は、面接試験の時の先生のあの困惑は、「指導教官」という立場で、誰かに関わることへの戸惑いというか、照れだったのかもしれない、思うようになった。先生のお話の端々からは、研究室で学ぶ私たち院生・学生を、先輩か姉のようにお心にかけるだけでなく、逆に人として頼りに、どこか心の支えにされているような印象があつた。最終講義後の懇親会で、「私は、人が好きなのでしょうね」と先生ご自身でおっしゃっていたが、そんな先生のお人柄にとって、「指導学生」や「弟子」というのは、何だか戸惑う言葉なのかもしれない。先生にとっては、研究室に集まる人は皆、文学研究への情熱を共有する「研究仲間」、そんな思いで私たちに接してくださっていたのだと思う。私が道半ばにして転向した挫折感より、研究に対する前向きな未練を今でも抱いているのは、そんな先生の優しさのおかげである。

まだ研究室に在籍していたころ、院生の誰かと話したことがある。金沢先生の周りに指導学生が集まる様子は、先生を中心に人が固く集まるというより、緩やかに繋がる人の輪の中に、先生もいらっしやる、という感じだと。もし先生が、辞書のように多くの手を必要とする仕事をなさることがあれば、きっと燃え上がるような熱い思いの弟子たちというよりは、気づかないうちに手を取り合うように、先生の「仲間」が集うのではないだろうか。その中で生き活きとお話しになるかと思えば、皆を取りまとめる事務仕事の必要に迫

られ戸惑われる先生のお顔が、何となく目に浮かぶようである。